

1 アクティブ・ラーニングとは…

現在、高校教育においては、課題の発見と解決に向けた主体的・協働的な学習形態である「アクティブ・ラーニング」がキーワードとなっており、その重要性は今後高まっていくものと考えられています。

ポイント

- アクティブ・ラーニングとは、「主体的・協働的な学習形態」と言われますが、決して新しい概念ではなく、これまでも授業の中で取り組まれてきた学習方法です。
- 特定の構造、構成、スキルの育成に限定していないことから、一方的な講義型の授業以外はアクティブ・ラーニングととらえることができます。



Column (「新たな未来を築くための大学教育の質的転換に向けて～生涯学び続け、主体的に考える力を育成する大学～」平成 24 年 8 月中央教育審議会答申より)

「アクティブ・ラーニング」については、研究者によって様々な捉えられ方がされていますが、文部科学省(中央教育審議会)では、以下のように定義しています。

教員による一方向的な講義形式の教育とは異なり、学修者の能動的な学修への参加を取り入れた教授・学習法の総称。学修者が能動的に学修することによって、認知的、倫理的、社会的能力、教養、知識、経験を含めた汎用的能力の育成を図る。

発見学習、問題解決学習、体験学習、調査学習等が含まれるが、教室内でのグループ・ディスカッション、ディベート、グループ・ワーク等も有効なアクティブ・ラーニングの方法である。



2 いま、なぜ、アクティブ・ラーニングが必要なのか？

アクティブ・ラーニングが求められている社会的背景として、グローバル化や絶え間ない技術革新の進展により、社会や職業の在り方が大きく変化する時代において、社会で求められる人材像が大きく変わってきたことがあります。

工業社会（高度成長期）

- ・ 規格品の大量生産を行う製造業が大きな力をもっていた社会
- ・ 標準化された知識を効率よく身に付け社会に順応していくことが求められた。



知識基盤社会（現在の社会）

- ・ 私たちの手元に大量の情報が瞬時に届く社会
- ・ 知識を活用して新しい未知の課題に試行錯誤しながら対応できる力が求められるようになった。

そのため…

ポイント

これからの時代を生きていく子どもたちには、様々な情報や出来事を受け止め、主体的に判断しながら、自分たちの生きる社会の未来をどう描くかを考え、多様な人々と協働的に課題を解決していくための資質・能力の育成が必要

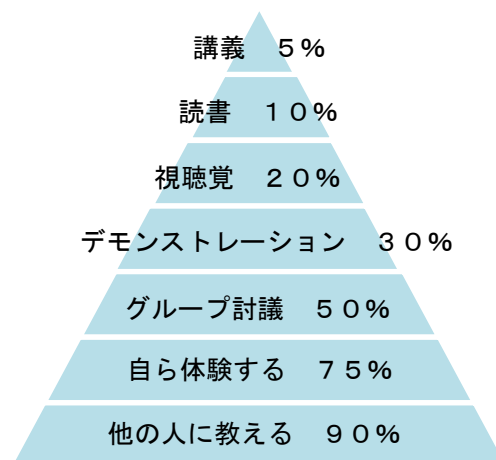
3 アクティブ・ラーニングを取り入れた授業のすすめ

効果 …… 【ラーニング・ピラミッド（平均学習定着率調査の結果による分析）】

右の図は、授業で学習した内容を、半年後にどの程度記憶しているかについて、学習形態別に分析して、図式化した「ラーニング・ピラミッド」と呼ばれるものです。

この「ラーニング・ピラミッド」からは、講義中心の学習と比較して、デモンストレーションやグループ討議、直接体験、他者に教えるなどの学習方法が、いかに学習内容の定着に効果的かが分かります。

こうした学習方法こそが、現在、求められているアクティブ・ラーニングそのものなのです。



出典：アメリカ国立訓練研究所の「平均学習定着率調査」から

授業形態の転換 …… 【教授法の転換】

アクティブ・ラーニングによる授業においては、生徒が中心となって活動する“学習者中心の授業”への転換を図ることが必要です。

しかし、“学習者中心の授業”への転換を図るからといって、講義や説明中心による指導の在り方が否定されるわけではありません。分かりやすく説明できる話し方、板書の方法、興味・関心を喚起できる教材提示の仕方など、これまでの優れた指導法を継承しながら、両者のバランスを図った授業を展開することが大切です。

相互交流の多い思考・発信型の授業
(学習者中心、能動的な協働学習)

一斉画一的な暗記・再生型の授業
(教員中心、受身の一斉学習)

Column 何がアクティブなの？

アクティブな授業とは教員がアクティブになるのではなく、生徒がアクティブになる授業です。
また、教室がにぎやかになることではなく、生徒の頭の中がアクティブになる授業です。

ポイント …… 【アクティブ・ラーニングを進める上でのキーワード】

意識化

これまで、授業においてアクティブ・ラーニングは取り組まれてきました。

今後、アクティブ・ラーニングをより一層充実し、効果的なものにするためには、どの単元で、授業のどの場面(導入・展開・まとめ)で、どの形態で実施するのかなどを意識して取り組むことが重要です。

外化

アクティブ・ラーニングでは、自分が理解したことや考えたことを他者に伝えるため、話したり、書いたり、発表したりすることが、重要な要素の1つです。これを「外化」といいます。

この「外化」により、生徒は、他者のもつ多様な考えに触れ、自らの学びを深めることができます。

バランス

「アクティブ・ラーニングの充実」は、必ずしも、講義中心の授業を全てアクティブ・ラーニングに転換することを意味しているわけではありません。

生徒が学ぶ内容によっては、講義中心の授業が効果的な場合もあり、両者をバランスよく取り入れた授業の展開が重要です。

4 アクティブ・ラーニング型の授業の展開例

アクティブ・ラーニングの授業方法には教科・科目によって様々な形態があります。ここでは、グループワークを取り入れた授業展開を、一例として紹介します。

導入	<p>教員による説明</p> <ul style="list-style-type: none"> ○ 教員がこの授業の目標、流れ、課題などを説明する。 <ul style="list-style-type: none"> ・ プロジェクター等により、本時の学習内容を説明する。 ・ グループで取り組む課題について説明する。 ・ グループワークを行う際の目標等について説明する。 <p>《留意点》</p> <ul style="list-style-type: none"> * 授業のはじめに教員が本時の目標（めあて・ねらい）を示す。 * 学習内容の説明は、プロジェクターによる投影、説明資料の配付など、簡潔に行う。 * グループの組み方について <ul style="list-style-type: none"> ・ 生徒一人ひとりの役割が固定化されないよう、くじ引きなどでグループを決定する。 ・ 発言する、質問する、説明する、動く、グループで協力するなどの態度目標（規律、きまり）を明確に生徒に提示する。
展開	<p>グループワーク</p> <ul style="list-style-type: none"> ○ 生徒に課題を取り組ませる。 <ul style="list-style-type: none"> ・ 基礎的、基本的な課題から、段々と難しい課題になるよう複数の課題を並べる。 ○ 課題について、グループで交流し深めさせる。 <ul style="list-style-type: none"> ・ 生徒一人ひとりに、課題に対する自分の答えや意見を考えさせる。 ・ 考えたことを他者と共有させる。 ・ 他者から得た情報を参考に自分の考えを修正させる。 <p>《留意点》</p> <ul style="list-style-type: none"> * 教員の関わり方（質問による話し合い活動への指導方法）について <ul style="list-style-type: none"> ・ 内容（コンテンツ）についての質問ではなく、話し合いの状況についての質問をする。 ・ どこに向かって、何を答えればよいのかが明確になるような質問をする。 ・ 指示的でなく、次の思考や行動を促すための質問をする。
まとめ	<p>生徒による発表等、授業の振り返り</p> <ul style="list-style-type: none"> ○ 課題について、グループで発表させる、または、教員が解説する。 ○ リフレクションカードの記入などにより、本時の授業の振り返りを行う。 <p>《記入項目例》</p> <ul style="list-style-type: none"> <input checked="" type="checkbox"/> 学習態度についての質問「話し合いの際のきまりに従って活動できたか」「それによって気付いたことは何か」など <input checked="" type="checkbox"/> 学習内容について分かったこと、分からなかったこと、意見など <p>《留意点》</p> <ul style="list-style-type: none"> * 生徒が学習した内容を自ら振り返ったり、まとめたりする活動を取り入れる。 <ul style="list-style-type: none"> ・ 授業での体験を振り返り生徒が様々な気づきを得る。 → 次の時間の学びにつながる。

ポイント

まずは、毎回、短時間でも生徒による活動を設定して試みるのが大切です。回を重ねていく中で、生徒も積極的に取り組むようになります。また、話し合いなどのアクティブ・ラーニングに充てる時間をつくり出すための工夫も必要です。

Question & Answer

Q 「アクティブ・ラーニング」と「言語活動」とは、何が違うのでしょうか。


A 理念や考え方については、基本的に違いはありません。

- 「言語活動」とは、生徒が主体的に思考・判断するために、批評、論述、討論などを通じて考えを深めていく活動であり、課題の発見・解決に向けて主体的・協働的に学ぶ学習（「アクティブ・ラーニング」）とは、生徒による主体的な学びという面をはじめ、多くの共通点があります。
- このことから、現行学習指導要領のポイントである「言語活動の充実」が、「アクティブ・ラーニングの充実」につながると考えられます。

Q 全ての授業は、アクティブ・ラーニングに変わっていくのでしょうか。

A 生徒の学習形態は、アクティブ・ラーニングだけではありません。

- アクティブ・ラーニングは、今までの授業が、「知識の伝達を中心とした一方的で画一的な指導者中心の形式になっていないか、そのことが、結果として学習者に期待する学力をしっかりと育てているのか？」といった問いから出たもので、現在の授業形態を完全に否定しているものではありません。
- 現在でも、講義一辺倒ではなく、生徒が主体的に取り組む何らかの活動を取り入れた授業が行われているはずです。
- 大切なことは、学ぶことと社会とのつながりを意識し、「何を学ぶか」という知識の質や量の改善に加え、「どのように学ぶか」という、学びの質や深まりを重視することです。
- また、学びの成果として「何ができるようになるか」という視点が必要です。

 **Column** 「育成すべき資質・能力をふまえた教育課程の構造化」

何ができるようになるか

新しい時代に必要となる資質・能力の育成

**育成すべき資質・能力を育む
観点からの学習評価の充実**

何を学ぶか

育成すべき資質・能力を踏まえた、新たな教科・科目等の新設や目標・内容の見直し

どのように学ぶか

育成すべき資質・能力を育むための課題の発見・解決に向けた主体的・協働的な学び（「アクティブ・ラーニング」）

（「初等中等教育における教育課程の基準の在り方について」諮問）

Memo
